近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

AKINDO委員会

三方よし（さんぽう）

第3号
1996／3

瀬田の唐橋

近江商人の金言名句

陰徳善事（いんとくぜんじ）

陰徳（いんとく）という語が近江商人の家訓や店則などには多く出てくる。成功した実業家が巨額の寄付を社会公共のために、名も告げずに投げ出すと言う陰徳の精神は理解されにくくなっているが、隠徳の精神は近江商人の間では実在していた。

大津逢坂山の車石の敷設工事、瀬田唐橋の一手替え工事、そして街道の常夜灯の建設などがよく知られる。現代における企業の社会貢献の一歩先を実行していたのであった。

三方よし　「三方よし」は近江商人共通の経営理念。「売手よし　買い手よし、そして世間よし」の精神で地域社会に大きく貢献した。本紙は近江商人を代表する理念を表題としている。

CONTENT

■シリーズ第三回
現代に生きる
近江商人の知恵……2～3頁
■水口青年会議所
あきんど委員会の取組み……4頁
■滋賀大史料館開館……5頁
■近江商人の足跡を訪ねて……6頁
■家訓カレンダーの反響……7頁

現代に生きる近江商人の知恵

岡崎女子短期大学講師　井口　貢

第３回

商人は商品の売買を通じて利益を得る。そして業態を拡張し、商圏を拡大し一層の利潤を追求していくのは当然であり、いずれの商人も方法が異なれど、あくなき利潤を追求してきた。しかし近江商人が注目されるのは、その利益を社会へ還元したその手法に特徴があり、その精神がとくに注視されているのである。本稿は今回で一応最終回となる。これだけで近江商人のすべてを網羅できなかったが概略のご理解をいただけたのではないだろうか。

草津川堤防の常夜燈

●フィランソロピーの先駆者

陰徳善事。前稿の末尾で、これが企業メセナやフィランソロピーの精神の本質でなければならないと述べた。営利・売名・打算を目的としない、利益の社会還元としてのフィランソロピーすなわち企業の社会貢献は、メセナ活動（企業の芸術文化支援）とともに、バブル経済全盛の折、資金的余裕が生まれたことにより、あたかも百花繚乱のごとく社会のなかで咲き誇った感がある。しかし、我が国におけるフィランソロピーの歴史は決して新しくはない。明治末から昭和初期にかけて、いわゆる四大財閥[1]をはじめとする多くの大企業がこうした行為を実践している。ドイツに生まれて日本でも多くの業績を残した経営学者J．ヒルシュマイヤー[2]（一九二一～一九八三）は「明治の企業者たちは、利潤をあげることと、公益を重んずることとの二つの価値観のうち、企業者であるにもかかわらず、むしろ後者の方により大きな重点を置いた。」というが、この指摘に触れると、〝三方よし〟という言葉を連想してしまう。陰徳善事と三方よしを要諦として展開された近江商人の商法と実践のなかには、自ずとフィランソロピーの構想が芽生えていたのではないだろうか。実際に、明治期の財閥よりも早い江戸後期にすでに多くの試みがなされている。前稿でその家訓を引用した中井源左衛門良祐の子である正治右衛門（一七六五～一八三八）による実践はその圧巻といえよう。良祐の子息のなかで最も聡明の誉れが高かったといわれる彼の寄付作善には枚挙に暇がなく、その数は七九件にのぼり、当時の金で表せば総額八六七八両に達していたという。幕府は、これらの功により苗字帯刀を許したが、さらに正治右衛門没後八〇余年を経た大正の世となって従五位が贈られているという事実は、近代日本が彼の精神を評価したからに他なるまい。彼のこうした社会貢献の精神は、一八一二年（文化九）に始まる瀬田唐橋の架け替え修理事業に典型的に表れている。正治右衛門は一〇〇〇両の見積りで可能な架け替え事業に対して、三〇〇〇両の寄付を幕府に願い出ている。残りの二〇〇〇両は利殖し、その利子の積み立てを含めて、再び唐橋が老朽化した際には、永久に架け替えが

県無形文化財に指定されている日野町馬見岡綿向神社の例祭。豪華な曳山は日野商人の繁栄がしのばれます。

注(1)…三井、三菱、住友、安田の四企業グループをこう称した。

注(2)…名古屋の南山大学では学長職を務めるほどの親日家でもあった。

行え続けられるようにとの配慮に基づくものであったのである。正治右衛門はこの事業の現場監督にも自ら当たり、資材の材質吟味等まで行ったという。また、大津・京都間の交通難所の舗装に協力したことも彼の大きな業績として採り上げなければなるまい。車輪の通路に花崗岩を敷く形で完成したこの道路改修は、心学者脇坂堂が発案し、今でいう市民運動のような形で推進され、正治右衛門はここに一〇〇両に及ぶ資金援助を行ったのである。

■車石

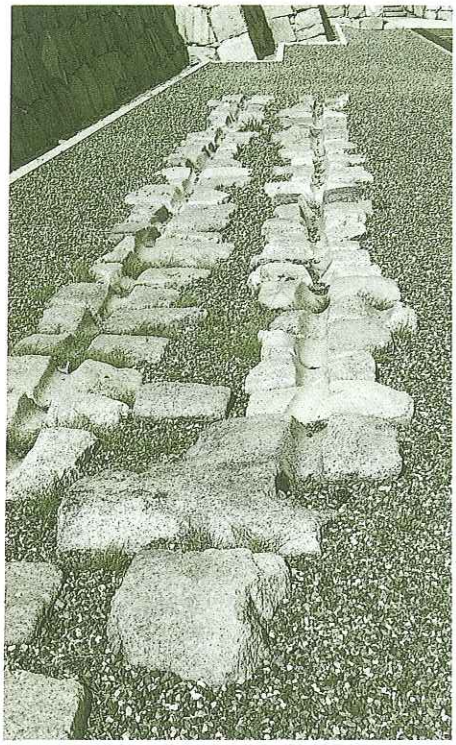
大津と京都を結ぶ東海道は、米をはじめ多くの物資を運ぶ道として利用されてきました。

江戸時代中期の安政八年（一七七八）には、牛車だけでも年間一五、八九四輌の通行がありました。

この区間は、大津側に逢坂峠、京都側に日ノ岡峠があり、通行の難所でありました。京都の心学者脇坂義堂は、文化二年（一八〇五）に一万両の工費で、大津八町筋から京都三条大橋にかけての約一二kmの間に牛車専用通路として、車の轍を刻んだ花崗岩の石を敷き並べ、牛車の通行に役立てました。これを「車石」と呼んでいます。

ここにある車石は、追分町の旧東海道の改修工事の際に発見されたものです。

旧東海道の改修工事で掘りあげられた車石は大津市歴史博物館など各地でみることができます。



大津市歴史博物館前に保存している車石

●市民を支える企業

企業市民（コーポレート・シチズン）という言葉が、今日しばしば流布している。

企業も市民と同様地域社会に住む、その社会の一構成員であるという自覚をもたなければならないのである。私は、これからの時代、社会における三つのCIを強調したいと思う。すなわち、コーポレート・アイデンティティ（その企業の存在根拠）、シティ・アイデンティティ（その街の街たる所以）、コンシュマー・アイデンティティ（市民・消費者としての存在根拠）の三つである。この三者が地縁（地域というコミュニティがもたらす紐帯）と知縁（情報というネットワークが賢明に取捨選択されてもたらされる紐帯）を仲立ちにして密接に結びついて、掛け替えの無い本物の地域の実現と生き甲斐のある真の豊かな暮らしを希求していく必要があるだろう。企業による地域社会に対するフィランソロピーは、その紐帯づくりに欠かせないものである。営利・打算を背後に持たない真のメセナ活動、フィランソロピーが望まれる所以でもある。

「しがぎん経済文化センター」は、創立以来十年余にわたって、滋賀県の芸術文化活動を支援してきている。一年程前に当センター社長の高橋敬二氏とお話させていただく機会を得た。その時の氏の印象に残る言葉を引用したい。

「われわれの活動は、メセナでもフィランソロピーでもありません。挑戦なのです。」バブル崩壊後のリストラの嵐のなかで、多くの企業がメセナ・フィランソロピー部門を縮小化する傾向に対してのシニカルな光が氏の眼のなかには確かにあった。

■横町の常夜灯

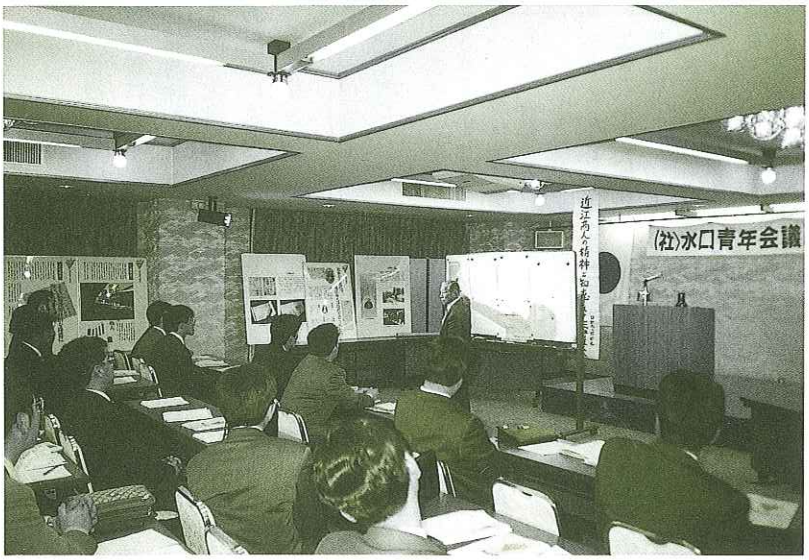
草津宿では東海道と中山道の分岐点があり、また、東海道と金勝寺道の分岐点もあって、夜間その区別が紛らわしかったので、それぞれの分岐点に常夜灯を建てたのであるが、それは五メートルほどの大灯篭で、基は石、火袋台から上は青銅の見事なもので工費は銀にして五貫九百四十四匁三分三厘、これに永代油料銀一貫を添えて中井正治右衛門が寄付した。

水口青年会議所

あきんど委員会（本年発足）の取組み
チャレンジ＆チャンス

近江商人に学ぶ自己改革へのチャレンジ

社会・経済のシステムが大きく変わる今、自己改革こそが活性化への最大の武器であり そのために近江商人の商法や知恵を大いに学んでいこうと事業の展開をはじめた。



水口青年会議所の本年度中澤理事長の方針は「社会・経済のシステムが大きく変わろうとしている現在こそ、青年経済人として、やわらかい発想で夢のあるビジョンをもって自らの手で時代を乗り切ろう。そのために自分自身を知り、自分をコントロールできれば自己改革はできる。自己改革こそ改革・活性化のキーワード」ということである。この理事長の所信を受けて、本年度発足した水口青年会議所あきんど委員会では、「自己改革のために今も受け継がれている近江商人の精神に学び、やわらかい発想と自主性をもって自己改革に果敢にチャレンジ」する行動目標が決定された。

そして去る三月五日の定例会では、近江日野商人館館長の正野雄三氏の「近江商人の精神と知恵」の講演会を実施。さらに六月例会や九月のセミナーで、近江商人の知恵や商法を学ぶ事業を予定している。

水口青年会議所あきんど委員会よりのメッセージ

水口青年会議所研修室
あきんど委員会委員長
岡崎正司

戦後、日本経済の高度成長で、私たちの社会や生活は豊かになり、物質的に得たものは大きい。しかしその反面、いつのまにか、ものの豊かさと引き換えに、人として経済人として生きていくための必要なモラルを見失ってしまったことが、現在の金融問題等々の経済不透明化を招いたのではないかと思います。

こうした現在にこそ、現代人からみても学ぶべき示唆と教訓に満ちている近江商人が確立した商業論理、経営哲学、理念こそ見直す必要があると思われます。そこで本年度あきんど委員会では近江商人の「すべて」を学び取って、我々青年経済人としてやわらかい発想と自主性をもって自己改革にチャレンジして次代を切り拓くあきんどとなるよう事業を推進いたします。

まず、三月度例会では近江商人の精神に焦点をあて、商人として、人間として一番大切な「心」倫理を中心に勉強。

そして、六月度例会では「知恵」に焦点をあて、現代の高度に組織化、システム化された経営とドッキングさせ、新しい経営戦略を見いだす。

そして九月度セミナーでは「近江商人の商法の実践」というテーマで修得した精神と理念を持って、経済人として志を高く抱き、それを明日からの職場へ、又、社会へフィードバックできる青年経済人となるべく事業を行いたいと思っています。

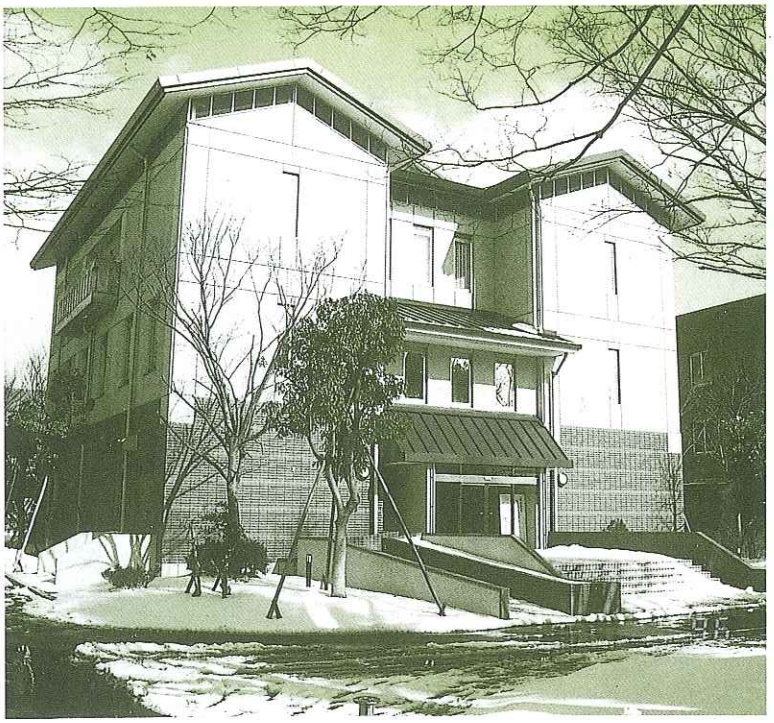
具体的な事業内容は決まっていませんが、メンバー全員一丸となって取り組んでおります。皆様のご協力のほどよろしくお願いいたします。

近江商人研究・商業史・中世惣村研究

滋賀大経済学部附属史料館全面開館

重要文化財の「菅浦文書」や「今堀日吉神社文書」を所蔵する歴史ある滋賀大学経済学部付属史料館は、平成六年に鉄筋コンクリート三階の建物が完成し、順次移転作業が進められていたが、この程資料移転の完了に伴い、全面開館となり併せて展示室が開室した。

開館記念として「惣村の自立と生活」の特別展示と常設展「近江商人と村のくらし」が開催された。今後順次所蔵品の展示がおこなわれるという。今後の事業展開が期待される。



■史料館の概要

昭和十年に滋賀大学経済学部の前身の彦根高等商業学校内に近江商人研究室が設置されたことが当館の出発。その後、滋賀大学経済研究所に史料館が設立され、昭和二十七年には博物館担当施設に指定された。

新築建物は展示室、収蔵庫、閲覧室、講義室などがある三階建。この中に古文書十万八千点が収蔵されている。

収蔵文書の中でとくに、国の重要文化財となっている「菅浦文書」は高校の教科書には必ず掲載されるという貴重な文書で中世の惣村を知るうえでの一級の資料である。また非常に稀少な近世の資料として第百三十三銀行他の銀行帳簿がある。

常設展示「近江商人と村のくらし」

近江商人研究室として発足した当館には、近江商人に関する文書や歴史を物語る多くの史料が収蔵されている。これらは一階の常設展示室に展示されているが、今後年に二回くらいの企画展示・常設展示が予定されており、近江商人関係の企画展もいずれは開催したいとのことである。多くの所蔵品の中から一部常設展示の内容をご紹介する。

近世商人の代表的な一つである近江商人に関しては商業活動の特徴をとらえて、商業簿記や商売の道具が系統的に展示されており、北海道や海外交易の様子や本店・支店間の書簡が興味深い。そして、商業活動の表面の解説だけでなく、男性中心の商業活動を支えた妻子の日常の生活や、村にあっては「百姓」を自覚した商人たちの「村人」としての生活のようすも紹介されている。展示室奥には、農業用揚水機がデンと座っている。中国から伝わり、昭和初期までは使用されていたという「竜越（りゅうこし）」と呼ばれる木製の水き板が桶のなかを通って水をかきあげるものだという。

当史料館に収蔵の近江商人関係物のなかでも日野町の豪商中井源左衛門家の一八七七四点の史料は非常にまとまったものとして学術評価が高いといわれている。一方、商業史料として北海道交易の近江八幡出身の西川伝右衛門家の北海道の支店日誌など五〇〇点は利用度の高い史料といわれる。

開かれた大学の一環としての当館では、広く各方面の閲覧に供したいという姿勢であり、多くの人々の利用を期待している。ただし現状は資料の量と人員の関係で十分な整理ができていないことが大きな課題であるようであるが、近江商人の商法やその経営理念と生活の足跡をたどるために大きな一助となることと思われる。

◆滋賀大学経済学部附属史料館
彦根市馬場一丁目一一
0749-27-1046
開館時間・利用時間…毎週水～金曜日
午前九時三十分～午後四時

近江商人の足跡を訪ねて

群馬県

日野町出身　岡崎醤油㈱
八日市市出身　㈱丸一高畑商店

去る12月AKINDO委員会事務局では、近江商人の足跡の調査のため群馬県を訪問し、現地でご活躍の近江出身の企業経営者にお話しを伺った。

上州高崎市は、その昔宿場町として流通経済の中心地であり、生絹などの問屋が多く立ち並び、中山道六十九次の中で最も繁栄を誇ったとされている。かつて、多くの近江商人が中山道を通って近江中部地域から高崎まで約四四〇キロの行程を幾百回と往復したのである。資料によると午前四時頃から歩きはじめ、一日に一〇里程度進んだといわれ、テレビドラマのようなのんびりとした旅ではなかった。

今回、近江商人の足跡に少し触れようと、委員会ではじめて群馬県を訪れた。北関東地方に進出した商人の数は多く、しかも広範囲で活躍しており、今回は多くの企業を訪問できなかったが、現存する二社のお話を伺うことができた。

高崎駅から上野方面へ二つ目の新町駅の近くに岡崎醤油㈱の本社・工場がある。日野町出身の初代源左衛門が、元禄年間に日野碗・漆器などを東上州へ持ち下り、絹・生糸を登せ荷して行商をはじめ、宝永元年（一七〇四）新田郡大原本町で酒造業をはじめたとされる二九〇年余りの歴史を持つ企業である。

岡崎芳夫社長は「あまり近江商人（近江出身）を意識したことはない」とおっしゃっていたが、「訓」と明記された社訓や会社所有の仏壇に慶応年間の奉公人の位牌が保管されているなど近江商人の信仰の厚さを物語っており、重厚な金庫には歴史を感じさせられた。現在も旧家と墓所は日野町に現存しているとのことで、近江との絆がむすばれているのである。

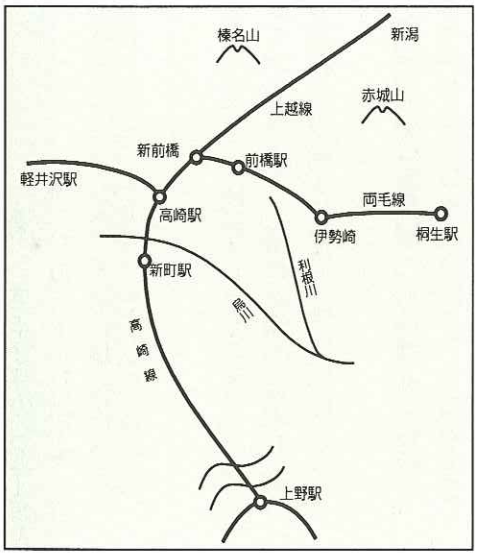
新町駅から烏川・利根川を越えると伊勢崎市に入る。北方に榛名、赤城の山々が連なり上州名物空っ風の強い所である。ここに宝暦二年、初代高畑与平が蒲生郡市原村（現八日市市）より出て、伊勢崎本町に酒店を創業したのが㈱丸一高畑商店である。

ここで、高畑正三会長と㈱レモンの高畑文一副社長にお出会いした。前記岡崎家では、かつて近江出身者を多く採用されていたが、高畑家では、郷土化を行わず、従業員は現地で採用していた。しかし郷土の酒造会社との取引は長年続いているとのことである。商家では、養子縁組が多いとされているが、高畑家でも現会長の七代目まで、すべて養子縁組によって事業が継承されてきた。

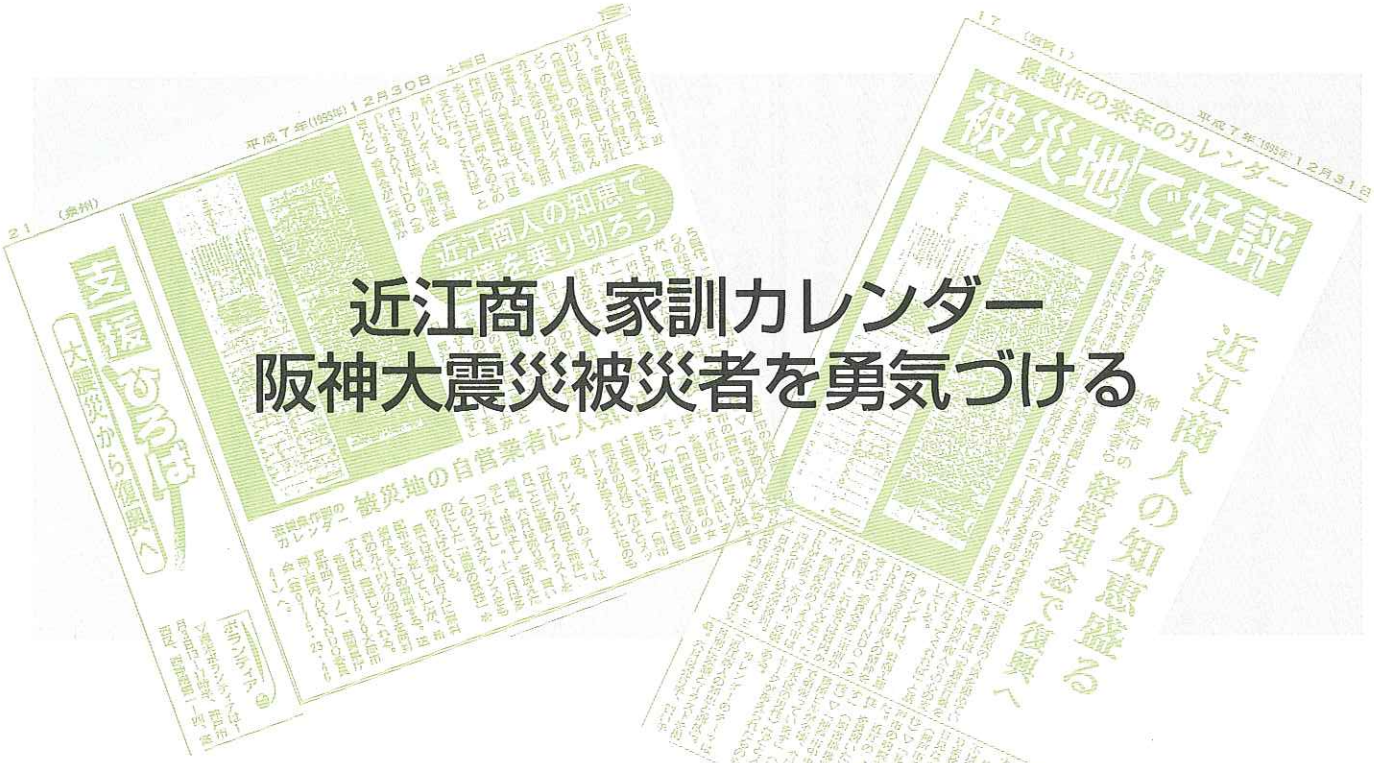
平成元年に群馬県内の滋賀県出身企業で新会社を設立されたという。かつての乗合商合が現代にも息づいているのであろうか。それでも時間の経過と距離間の問題で近江出身者の人々の中で次第に祖先の出身地に対する想いが次第に薄らいでいくのは少々残念に思うが、ここ群馬において多くの近江出身の企業がご活躍されている現状を目の当たりにして末裔の皆さんの力強さに意を強くしたものである。北関東はとくに醸造関係の仕事では近江商人が先鞭をつけていたこともあり、現在でも高畑氏のお話の中には多くの近江出身者のお名前が登場してき、層の厚さに驚嘆した今回の旅であった。

今回の企画に関しては、元群馬県文書館館長　井上定幸氏に多大のご尽力をいただきましたこと厚くお礼申し上げます。井上氏には今後、群馬県における近江商人の功績に関するご執筆をお願いしていきたいと存じますので何とぞご期待ください。

（AKINDO委員会　小杉　記）



左から　井上定幸氏、岡崎芳夫社長、岡崎賢二郎元専務、吉江璋一常務

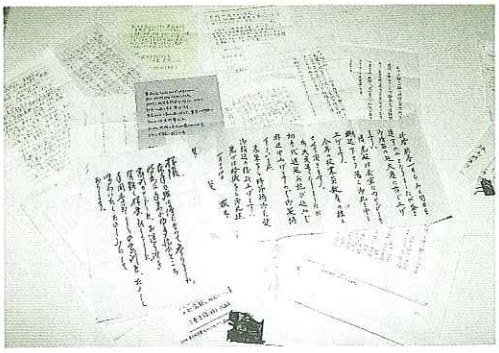


近江商人家訓カレンダー
阪神大震災被災者を勇気づける

毎年好評の「近江商人家訓カレンダー」の平成八年は「近江商人の知恵と商法」のテーマで昨年末に発行しましたが、不屈の精神で独自の商法を確立した近江商人の精神が、昨年の阪神大震災で被害を受けられた人々に大きな反響を及ぼし、多くの被災者の方々からのお申込みとお礼の手紙が事務局に届けられました。

昨年十二月八日に平成八年「近江商人の知恵と商法」のカレンダーを発行し、例年のように希望者に配付しました。本年はとくに近江商人の商法を現代の経済状況に照らし合わせて解説を加えて好評を博していましたが、新聞各社の報道も大きく取り上げられ、また十二月十三日にはNHKのテレビおよびラジオで近畿地方に報道され、阪神大震災の被災者の方からのお申込みが相当数ありました。

そして、その後「震災の影響でうちひしがれていたが、カレンダーで勇気づけられ、頑張ります」とのお礼状が続々と届けられました。近江商人の不屈の精神が大きく影響したものであったのでしょうか。思いがけない多くのお申込みで当初より大幅に増刷して対応しました。報道直後の事務局は電話が通じない状況が続きました。以下、カレンダー希望者の声を一部紹介させていただきます。



- 震災と不景気の影響で業績があがりません。カレンダーを見ながら頑張ります。(神戸市男性)
- 事務所ビルが全壊しましたが、自宅で頑張っています(神戸市男性)
- 被災地の我々にピッタリ。精神的にくたびれてきましたので、カツをいれます。(神戸市産科医師)
- 勤務先の病院も被災しましたが、商人根性を毎日みながら頑張ります。(神戸市男性)
- 近江商人の家訓の何分の一かが実行できたらと思う。
- ブラジルの息子に送りたい。
- 先祖が灌漑技術指導に滋賀にいったという(新潟市)
- 質素・倹約・節約・努力の精神を見習っています。(大阪市)
- 草津より大阪に出て二十年。近江商人の血が流れています。
- 滋賀の商業文化に興味を持ちました。
- 甲賀がふるさと。どんな小さなことでも滋賀に興味がある。
- てんびんの詩のビデオを見た。近江商人の心は商売の基本である。
- 若い者の教育用として永久保存する。
- 先祖が近江出身で行商をしていた。先祖の土地を訪れたい(宝塚市)

など

地域別申込み数

大　阪	486	(24%)
兵　庫	237	(11%)
奈　良	93	(4%)
京　都	469	(23%)
和歌山	43	(2%)
その他	78	(4%)
滋　賀	660	(32%)

お知らせ

近江商人の足跡を訪ねる『ふるさとマップ』いよいよ完成

滋賀県内の近江商人関係資料館周辺の案内地図発行の準備を進めていましたが、地元各企業のご協賛をいただき、三月末にいよいよ完成します。近江八幡・湖東町・五個荘町・日野町そして高島町と多くの近江商人を輩出した地域の交通案内と近江商人に関係した各地の資料館を紹介しています。協賛企業および、各地の資料館などで配布を予定。

お問い合わせはＡＫＩＮＤＯ委員会まで

（☎〇七七五―二三―四六四一）

高島商人のふるさと安曇川町より「わが心のふるさと」―活躍する安曇川の若鮎たち―を発行

小野組に代表される高島商人の多くが安曇川町から東北地方へ出掛けている。盛岡の城下町の建設に多大の尽力をし、現在の東北経済界でも多くの近江出身者が活躍されています。

平成二年より安曇川町広報紙上で「わが心のふるさと」として、安曇川町出身者の随想を掲載してきたものを、今回まとめて出版しました。寄稿者の中には、末裔の方がおられ、一方頻繁に帰郷されている方など、各方面でご活躍の様子やふるさとの将来への熱い思いで綴られています。

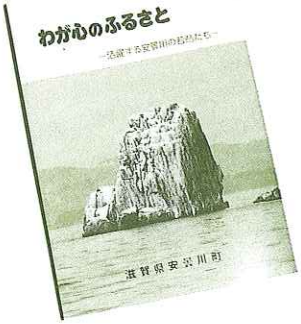
希望者には有料で頒布されます。

■問い合わせ先

滋賀県安曇川町総務課

☎〇七四〇―三二―一一三一

頒価五〇〇円（消費税込）



新たな産業社会への挑戦 ＡＫＩＮＤＯセミナー'96開催

ＡＫＩＮＤＯ委員会では、近江商人をキーワードとして、二十一世紀に対応できる経済人の育成を目的に、ＡＫＩＮＤＯセミナー'96を三月四日から三日間の日程で開催した。「新たな産業社会への挑戦―企業大変革に向けて―」をテーマにしたこのセミナーには、県内外から熱意とチャレンジ精神にあふれる25名の経営者や企業人の参加があり、初日の大津プリンスホテルでは一般からも750名の参加を得た。

■世紀末はチャンスの時代

初日の基調講演では、まずジャーナリストの嶌信彦氏が、「これからは自分で新しい道を切り開けばそれが世界のルールになる。世紀末は百年か二百年に一度の大チャンスだ。」と熱っぽい口調で語った。

続いて東海大学開発技術研究所教授の唐津一氏は「日本の技術は世界一。技術の用途開発をやれば、空洞化なんか心配ない。」と製造業を叱咤激励した。

二人の講演のあと参加者からは元気がでた、勇気付けられたとの声が聞かれた。

■ＡＫＩＮＤＯ宣言で大激論

受講生は、各分野の講義やグループごとにＡＫＩＮＤＯ宣言を取りまとめるワークショップなどに取組み、深夜まで激論が交わされた。

アンケート結果をを見るとほとんどの受講生が、良かった、そして仕事にも役立つと答えており、その理由としては異業種との交流、ビジネス上のヒントや刺激をあげている。既に何人かの受講生の間から早くも同窓会の話が持ち上がっている。

インターネットの講義風景

編集スタッフ募集

ＡＫＩＮＤＯ委員会では、本紙「三方よし」を発行していますが、より一層の紙面の充実をはかり、さらに近江商人の歴史事象などを調査していきたく、本紙の編集にご協力いただける方を募集しています。詳しくは事務局までお問い合わせください。

☎〇七七五―二三―四六四一

てんびん棒

「近江商人を創った血の秘密」という文章が昭和四十三年の文藝春秋三月号に掲載されている。これは過日亡くなられた司馬遼太郎氏が歴史を紀行するという連載の中で書かれたものである。石塔寺を訪ねて彼なりの独特の推理で近江商人の発生要因を追求されている。琵琶湖のほとり―この商業主義の先進地帯が生んだあざやかな才能はどこから来たのか？　この最初の問いかけではじまり、一部の不明点を除くと多くの近江人は経済観念と計数にたけた経理家的素質をもっていた。と推論が展開されている。近江商人とならび称される伊勢商人も蒲生氏郷が近江から呼び寄せた人たちである。その伊勢商人の代表三井家も蒲生郡の地侍三井越後守が祖であるらしい。近江商人を考えるとき、江戸時代のみの状況を捕らえるのでなく、もっと時代を逆上って手繰っていくことで、一層奥深い近江の商人の姿がうかびあがってくるのではないであろうか。

第３号　■編集・発行／ＡＫＩＮＤＯ会議　大津市京町四丁目一―一　ＡＫＩＮＤＯ委員会内